

地球時代の教育情報誌 エデュコ

# Educo

No.2 / 2003年 秋

地球はものすごく壮大で、気品があつて、  
きりっとした貴婦人が自分の前に立っているような、  
そんな感じに見えました。



◎地球となかよしインタビュー  
宇宙を仕事場として 向井千秋 2〜3

知っておきたい教育NOW 学力調査で何を見るのか? 安彦忠彦 4〜5  
学校評価とは? 木岡一明 6〜7

有田和正のおもしろ授業発見! ② 8〜9

親子一緒に農業体験 今西祐行 10〜11

インフォメーション 北から南から 12〜13

BOOK REVIEW 14

「知」を創る学習指導 その1 角屋重樹 15

わたしの「地球となかよし」メッセージ 入賞作品発表 16〜19

COLUMN ほっとな出会い 黛まどか 20



# 宇宙を仕事場として 向井千秋さん (宇宙飛行士・医学博士)

宇宙から地球を見ることによって、私は館林市出身、群馬県出身、日本出身だけど、やっぱり地球出身なんだと実感しました。こういう考え方の人たちが増えていることが、宇宙開発がもたらした最大の恩恵だと思います。

心臓外科医の向井さんが宇宙飛行士になられたきっかけは？

医者として10年働いて、自分の判断のもとに患者さんを診られるチーフレジデントになった頃、ある当直明けの朝に、日本が宇宙飛行士を募集しているという新聞記事を見てすごく驚きました。その募集が、パイロットを育てることではなく、宇宙という環境をうまく使って地球上ではできないような研究をすることだったんです。当時、宇宙飛行士とは軍のパイロットかなんかで、冒険家みたいなイメージがあったんですが、普通に働いている医者やエンジニアを宇宙に送り出す技術がもう20世紀にはあるんだと知って驚きました。

募集要項を取り寄せてみたところ、それまでの私の医師としての経験と、論文を書いていたこともあって、応募の資格はあったので、とりあえず応募してみました。そのときは自分が選ばれるなんて思ってもいなかったもので、1枚の宝くじを買ったくらい感じます。4次試験くらいまであったんですが、1985年の

8月に発表があり、好運にも毛利さん、土井さんとともに宇宙飛行士の候補生となり、11月から訓練が始まりました。

人を宇宙に送り出すために、医学の知識って実はすごく必要なんです。だからその分野で自分の医学の知識を役立てたり、あるいは重力のないところでさまざまな現象を調べたり、そういう研究にもすごく魅せられていきました。

私は2回飛行しましたが、いずれもそのキャッチフレーズは「仕事場は宇宙」というものでした。ロケットという素晴らしい乗り物が開発され、人間を宇宙に送り出す有人宇宙技術が発達してくれたおかげで、われわれの活動範囲が地球上から宇宙にまで広がっていった、そんな時代に私はいるんだ、ということにもすごく感激しました。

スペースシャトルでのメダカの実験でどんなことがわかりましたか？

メダカは脊椎動物です。通常、脊椎動物には体重を支えるために背骨があり、体重を支えるべき脊椎動物が体重の

ない、重力のない世界で発生できるかどうか、もし発生できないなら、どういう時期に重力の影響がないと正常な個体が発生できないのか、そういったことを調べようと思いました。

また、地球は大気

で覆われている

ので、宇宙放射線が入り

にくい環境

になって

いますが、

宇宙には

宇宙放射線が飛び交

っているから、

受精卵に当たると奇形やガンの発生率も

地球上より高くなると予想されます。

そこで、オス2匹、メス2匹のメダカ

を連れて行って、宇宙で交尾ができるかどうか、

正常な受精卵ができるかどうか、

その受精卵がちゃんと発育するかどうか、

そんなことを調べました。結果的にはメ

ダカは無重力の環境に慣れて、交尾もでき

て、その受精卵もちゃんと発育して、

奇形やガンの発生率なども地球上と宇宙

とで大差がない、という結論が1回目の

メダカの実験でわかりました。

ただ、それは宇宙で生まれた第一世代

に関してのこと、第二世代、第三世代

に関しては、孵化までに8日間かかりま

## 向井千秋さん プロフィール

群馬県館林市生まれ。1977年慶應義塾大学医学部卒業、同年～1987年慶應義塾大学医学部外科学教室勤務。1985年8月宇宙開発事業団よりパイロードスペシャリスト(PS:搭乗科学技術者)候補者として選定される。1994年7月8～23日、1998年10月29日～11月7日、PSとしてスペースシャトルに搭乗。



すから、将来、宇宙ステーションのようなところで長期に滞在して実験してみないとわかりません。

宇宙から地球を見て、人生観や地球観が変わりましたか？

宇宙飛行士が、こぞって地球をきれいだとか、人生観が変わったとか言っているのは、例えば日本を離れて外国に骨をうずめて生活していこうと決心した人が、



飛行服を着た向井さん（宇宙開発事業団提供）

日本を見るとすばらしい国だなあと感じるのと同じだと思っんです。故郷って、離れてみると郷愁の念がものすごく湧くでしょう？ すばらしいところだと思っ。ましてや宇宙では、スペースシャトルの外に飛び出したら死んでしまいますし、帰れない場合もある。そういう目で自分がいた故郷・地球を見ると本当にきれいに思えるし、そういう故郷を多くの人たちと一緒に共有しているということに誇らしさを感じるのじゃないか。

実際、地球はものすごく壮大で、気品があつて、きりつとした貴婦人が自分の前に立っているような、そんな感じに見えました。そして目を凝らすと、人間の生活している爪あとが見えるんですよ。例えば焼畑をした跡だとか、森林を伐採した跡、砂漠を緑地化している場所などを見ると、「すごいなあ、人間ってすごく小さな存在だけれども、こんなに大きな地球に生活の跡をつけてしまうようなことまでできるんだ」と感じました。人間はちっぽけだなあと思っ反面、人間の力ってまとまと地球の環境すら変えてしまっんだという感慨も覚えて、相反する思いがしましたね。

宇宙開発は人類にどのような恩恵をもたらしているのでしょうか？

例えば人工衛星を気象衛星やGPSとして利用したり、あるいは材料科学の実験を通して、地球上では作れないような半導体や新しい素材を作ったり、物理現象が解明できたり。また、宇宙は非常に特殊な環境なので、健康な宇宙飛行士でも宇宙から還つてくると老化や病気が似たような現象が見られますから、それを研究することによって、病気の新しい治療法も発見できる可能性があります。例えば宇宙飛行士は骨が弱くなつて還つてくるので、それを研究すれば骨粗しょう症や骨が弱くなる病気の人たちにも光がさすんじゃないかと思っます。そういうスピノフ（副産物）はいっぱいあるんですが、これらはマテリアル・スピノフだと思っんです。

それに対して、もっと大きなスピノフがあります。それを私はスピリチュアル・スピノフと呼んでいますが、宇宙から地球を一つの星として見ることによつて、多くの人の考え方や視野が広がつたと思っんです。広告を見て、地球とか宇宙という言葉がよく出てくるようになり

ましたし、天気予報でも世界の各都市の予報をしたり、ニュースでも地球が回っている姿がよく出てくるでしょう？ 多くの人が宇宙に行けなくても映像を通して地球を見ています。

また、地球はすごく狭いコミュニケーションにな

つてきていて、例えば自分が住んでいる国で環境汚染があれば、隣の国にもすぐ影響してしまう。だから地球規模でものを考えないといけない時代になつてきているということは、みんなもう認識していると思っんです。特に子どもたちは、そう考えて当たり前だと思っっているんですよ。

宇宙から地球を見ることによって、私は館林市出身、群馬県出身、日本出身だけど、やっぱり地球出身なんだと実感しました。こういう考え方の人たちが増えていることが、宇宙開発がもたらした最大の恩恵だと思っます。



子どもたちの理科離れが指摘されていますが、？

理科っていうのは、例えばA液とB液を混ぜると赤になる、というようなことを単に覚えるのではなく、「なぜ赤くなるんだろ？」とか「A液が半分でB液が2倍ならピンクになるのかしら」などと、実験や観察を通してじっくり考える教科なんです。ところが、アメリカでもそうなんです。カリキュラムがびっしり詰まっているため、そのようなゆとりがなくなつてきているのではないのでしょうか。いいにつけ悪いにつけ、非常にテンポの速い世の中になつてきています。ゆつたりもの考えてみるのが、子どもにしても大人にしてもなくなつたんじゃないかと思っんです。

日本では今年度からすべての土曜日が休みになつて、カリキュラムも少し緩和されているようなので、その空いた時間

をうまく使つて自分でものを考えてみるのじゃないかと思っます。

私はいつも子どもたちに、先生の言うことや教科書の内容を覚え込むのではなく、自分の目で見たいもの、聞いたもの、手で触つたものなど、自分の五感を通して感じ取つたものを大切にしたい、と言っています。それによって不思議だと思っことを見つけたら、どうしてそうなるのかなと考えて友達と試してみたらと言つと、みんな面白がつてやっています。子どもはどんな時代だつて好奇心のかたまりだと思っます。

チャンスがあつたら、3度目の飛行にチャレンジされますか？

私は宇宙という環境を利用して、地球上では見られないような現象を解明したり、地球上ではできない医薬品を作つてみたいと思って宇宙飛行士になりました。今回は行かないと思っます。まずは宇宙ステーションが完成して実験室として使えるようになり、国際共同研究ができるようになつて、私自身もその頃まで頑張つていけば、ぜひ行きたいなあと思っます。

多くの人が宇宙飛行は大変だと思っているかもしれませんが、今はロケットの性能も、人間を送り出すための宇宙医学や技術も向上したので、より多くの人が安全に宇宙に飛び出して活動範囲を広げていける、そんな時代になつたんですよ。だから、私もジョン・グレンさんのように77歳くらいになつても、3回目の飛行をし、また宇宙を自分の一つの仕事場として、いろいろ研究をやつていけたらいいなあと思っています。

# 学力調査で何を見るのか？



早稲田大学教授 安彦忠彦

最近の学力低下論議も、先立っての教育課程実施状況調査の結果によって結着を見たと言われている。しかし、ことはそれほど簡単ではない。なぜなら、低下しているとされた「学力」というものが、文部科学省の育てようとしていたものと同じものかどうか、調査の内容・方法上に何も問題はなかったのか、そして、結果の公表の仕方も含めて、その解釈の仕方に疑問の余地はなかったのか、等について、まだ十分に吟味がなされているとは言えないからである。

筆者は、学力低下論争の外にいて、その問題をいろいろと考えてきたので、少し整理してこれについて発言しておきたい。とくに、「学力調査」で見えるものは何なのか、何が見えて、何が見えないのか、どんな調査が望ましいのかについて述べてみたい。総じて、学力調査の示す学力を絶対視して議論することには大きな疑問を感じるので、その理由も含めて議論を深めたい。

## 理念学力、形成学力、測定学力の区別

次のような文章を読んで、そこで言われている「学力」ということばについて考えてみよう。

「この二つの文章で使われている「学力」という語は、同じ性格のものであるか。この違いに目を向けてほしいのである。」

① これからの学校教育にあつては、基礎・基本をしっかりと身に付け、学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力等を含めた真の意味での学力を育み、生涯にわたって主体的に学びつづけ、問題を解決していくことができる(中略)。このような学力を「確かな学力」と呼び、次代を担う子どもたちをしっかり育ていく必要がある。(大槻達也 文部科学省初等中等教育局教育課程課長「確かな学力」向上のための施策」指導と評価」、2003年8月号、4～5頁)

② 問題なのは平均的な学力の低下だけではない。格差の拡大を伴いながらの低下に目を向ける必要がある。(中略) 学年の昇格とともに格差が拡大し、中三になると、同じ割合の生徒が収まる点数幅は34～86点と(小五の40点～82点に比べて)10点以上大きくなる。(中略)つまり、学力低下の見られた算数・数学の場合、他の教科よりもできる子とできない子の得点差が大きく、しかもその差が中学生になると拡大するのである。(刈谷剛彦「なぜ教育論争は不毛なのか」中公新書、2003年、229～230頁)

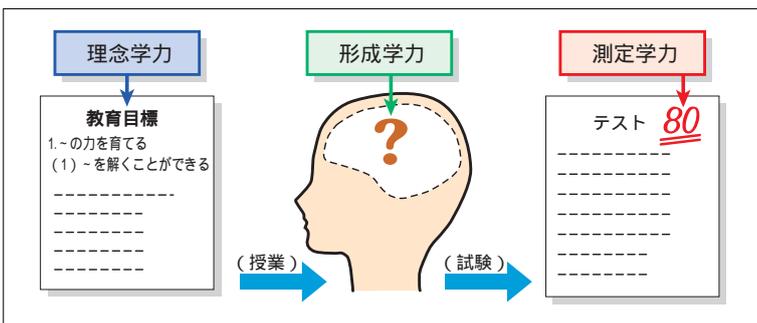
①の方の「学力」という語は、「教育が理念として追求すべきもの」として言われている。これに対して②の方の「学力」という語は、「学力調査などで測られたもの」として用いられている。同じ「学力」という語を使っているが、非常に性格・性質の異なる意味を付与されていることに気づかれるであろう。この違いをまずはお互いに認識し合った上で、「学力」という語の使い方を一致させなくては議論が

混乱し、生産的な論争にはならない。

筆者は①の「学力」を「理念学力」、②の「学力」を「測定学力」と呼び、ともに「子ども内部に育てられる学力」(それを「形成学力」と呼ぶ)そのものとは異なること、実際に育てられた「形成学力」はそのままでは全体的にとらえられず、「理念学力」ほどの理想的な形で育てられることはないとともに、また「測定学力」でとらえられる学力は、形成された学力を、一定の測定ないし計測の道具を使って「取り出し、切り取ったもの」であり、本当の学力の「測定値」部分でしかないと考えている。

この区別をまずは明確に認識してほしいのである。「学力」が「低下」したり「向上」したりすると言え、それは、「数量化して表現できる部分」、つまり「測定できる部分」だけの、しかも「学力そのものではなくそのカゲ」としてでしかない、ということである。ところが、「データ」を使わなければならない客観的で正確な議論はできない、とほとんどの学者が口にする。実は「データ」の意味や性格の違いが問題であるのに、それを問わずに絶対視して議論する。この誤謬は少しでも早く克服してもらいたいと思う。

もちろん、「学力」の高低は「測定学力」でしか論じられない以上、ある程度の客観的で相対的な正しさを前





提視しないわけにはいかない。けれども、より正確な、より一般的なことを主張するときは、この「測定学力」の限界性・限定性を明示しつつ、条件を付して行うべきである。このような「わきまえ」がないことに、まず注意を喚起しておきたい。

### 理念学力としての「確かな学力」について

その上で、あらためてAの「学力」を見てみると、そこでは「真の意味での学力」とか「確かな学力」とかと別称されているように、それは明らかに「理念学力」である。この「理念学力」についてはどう扱ったらよいのか。「理念として追求されるべき」ものに対しては、「向上」や「低下」は問題にならない。むしろ、それを「望ましいと価値づけることができるか」という観点からしか論じられない。つまり「学力観」として自分もそれを採用するか否かの問題、立場の問題になると言ってもよい。

そのように考えると、先の学力調査で論じられた「学力の低下」については、たとえ数値的に示されたものであっても、「低下」自体は問題ではなく、「何を望ましい学力と呼びたいか」という「学力観」のレベルから見ると、本来求めている学力そのものはいずれと測られているのか、そしてその部分が求められているレベルに達しているのか否かが問われることになる。単なる「平均点」や「総点」が問題なのではなく、「妥当性」(測るべきものを正確に測っているか)が問題なのである。

公平に見て、今回の学力調査(正確には「教育課程実施状況調査」であって典型的な学力調査とは言えない)からは、この「確かな学力」の形成状態は測定されていない。なぜなら、旧学習指導要領下の調査なのだから当然であろう。ただ、新学習指導要領も、旧学習指導要領とほぼ同じ方向性をもつものであるから、類推して心配することは許される。

しかし、むしろ学力調査で見るべきことは、妥当性の高い調査内容を計画・作成するとともに、その結果によって、学校教育のどこを、どのように修正すべきかが明示されるかどうか、であろう。今回の学力調査でそれが明らかになったのであれば、この調査は成功であり、国民に対しても説明責任を果たせると言ってもよい。新学習指導要領の示すところについて、何らかの補正が必要だとデータが出るならば、それに従ってすみやかに修正すればよいのである。それは今後のものであり、生かし方の問題であると言ってもよい。

### 「何のための」学力調査か？

そこで、あらためて「学力とは何か」が論じられているが、「学力とは何か」との問い自体が不用意に繰り返されている。この問いを出す人は大別して二つに分けられる。「学力とは何であるべきか」と問う人と、「学力をどう概念規定したらよいのか」と問う人である。

前者の問いを出す人は「自ら学び自ら考え、意欲的に問題解決をする力」と考えるべきだと主張しているのか、逆に「基礎的、基本的なことをしっかりと身につけ、理解する力」と考えるべきだと主張しているのか、という点に関心をもつ。今回の文部科学省の反論は、この二つの主張を対立的にとらえるのではなく、「これらの力が一人一人の良さを生かしながら一体的にバランスよく育まれることを目指したい」(大槻課長)として、そのような力を「確かな学力」と呼びたいと言っているわけである。この方向に誰も異論はないであろう。問題はこれを実現する方法・方策にある。この点での議論に、丁寧さやきめの細かさ欠けてきていたことは否定できない。

他方、もう一つの方の問いはどうか。「学力の概念規定」である。この方は誰もが認める、立場の違い

を越えたものであることが求められる。そして、それが意外にも重要な点を含んでいるのである。

一般に、教育学の世界では、「学力」というものを「学校で育てられる能力」だと押さえ、学校の外、とくに家庭や地域における子どもたちの自然体験や社会体験などから得られる能力とは区別しようとする。とくに、筆者のようなカリキュラム研究者は、「学力の客観的な対応物がカリキュラムであり、教育課程である」と強調する。そこから、「学力」を「学校の教育課程を通して育てられ、またそれを使って測られる能力」と考える。

ところが、この考え方に対しては、狭すぎるとして批判する声も強い。確かに、今回の「生きる力」などは広く全体的で、学校以外の場所でも育てられる能力まで含まれるほどのものである。「この意味では、「学力」の概念を規定する際にも、学校外で育てられる能力のいくつかを含め、それを土台に位置づけたら、実生活や実体験の場で、学校で育てられた能力を生かし、応用したりする能力を発展的に位置づけたりすることが必要であるかもしれない。それは「学力」の概念規定次第であるけれども、従来はその種の部分は隠れていて見えず、土台あるいは発展として働いていた能力であったと見ることができ。例えば、家庭や地域における学習や体験とのつながりに一層注目し、そこで働く力の育成に学校も従来以上に取り組みなければならないかもしれない。

「学力調査」はこの種の、このレベルの能力の働き具合まで調べるものでなければ、今後単なる「数量的な低下や向上」のみの議論を生むに過ぎないであろう。そうではなく、発表や公表の内容も仕方でも、学力の「質的な構造や働き具合」を示し、その改善策を明示するものとすべきである。それによってこそ、今後の学校と家庭と地域とが、どのような分担と協力関係をつくっていったらよいかといった展望が、「学力」についても開けるであろう。

# 学校評価とは？

## 信頼される学校づくりをめざして



国立教育政策研究所 木岡 一明

### いま、なぜ学校評価か

学校評価について熱い関心が寄せられています。いま、学校評価がこれほどにクローズアップされている背景には少なくとも四つの要因があります。

一つには、「今後の地方教育行政のあり方について」という第16期中央教育審議会の答申（平成10年）において、地方分権・規制緩和の一环として学校の自主性・自律性の確立などが打ち出され、学校（校長）裁量権の拡大に伴う、学校の経営責任の明確化、保護者や地域住民に対する説明責任と絡んで学校評価が提起されたことがあげられます。

二つ目には、学習指導要領の改訂があげられます。わが国では、学習指導要領が改訂されるたびに、したがってほぼ10年ごとに教育課程の実施状況を把握しなければならぬという観点から、学校評価のチームが起きてきました。今回の場合は、平成12年12月に教育課程審議会が学習指導要領の定着状況という観点から学校の自己点検・自己評価の実施を「学校の責務」として位置づけたことで、いっそうその観点が強調されてきたのです。

三つ目が学校不信の問題で、これが最も大きな要因です。神戸の「酒鬼薔薇」事件など中学生による悲惨で残酷な事件や、いわゆる「学級崩壊」などが続いたために、平成11年から12年にかけて、教育改

革国民会議の中でもこういった事件が取り上げられ、学校に対する信頼関係のあり方が議論されました。とりわけ公立学校に対しては強い不信感が示され、外部評価を含めた評価制度の確立が提起されました。

文科省はこうした諸提言を受けて教育改革プランをまとめ、その中で学校設置基準を定めることも盛り込みました。そして、学校が自己点検・自己評価してその教育の成果を公表して真価を問うという意味で、学校評価が法的にも位置づけられたのです。また、指導力不足教員への対応を検討していた中央教育審議会は、昨年2月に答申をまとめ、「信頼される学校づくりのために」と題して、学校と保護者・地域とのコミュニケーションの拡充を求め、学校評価システムの確立を提言し、各地の実態に応じた学校評価研究の展開を示唆しました。

四つ目は、今日の教育改革が国全体の構造改革の一環として新しい公共経営論（ニュー・パブリック・マネジメント）の考え方を採り入れ、成果主義や顧客主義、市場主義を基本的な原理にして展開されており、そのような考え方から学校評価を見直す機運が高まっていることがあげられます。

このように、今日の学校評価への関心の高まりは、教育改革とりわけ学校評議員制度や学校選択制、教員の人事考課などの学校経営制度改革の動きと密接に関わっています。

### 学校に組織マネジメントを

学校や教職員の間には、これまでだって学校評価に取り組んできたという認識でおられるところもあります。しかし、今日の学校評価の要請は、これまでのように、総花的で、年度末や学期末に行うようなかたちのもものでは満たすことができません。まして、教職員だけで行う反省会やアンケートの実施だけでは、学校への不信感を拭うことができません。

いまの学校は教職員がバラバラに動いています。一人一人には力があるかもしれませんが、その力がうまくまとまっていないので、子どもたちの学力につながっていないのではないのでしょうか。生徒指導にしても、一貫した姿勢を保ちにくくなっています。

教員によって教育観や指導観、子ども観が違うのは当然ですが、その違いを確認しないまま、それぞれの思いで指導している現状は問題です。しかも、そのことをお互いに評価したり批判しにくい状況にあります。これがいわゆる同僚性の喪失という問題です。

同僚性で最も大事なものは、お互いに批判し合える関係をつくることです。同僚性が高まっていくと協働性も高まり、何事にも全体で一丸となって取り組むようになり、それぞれの役割が明確になってきます。これは組織としても強くなっていくことです。教育力を高めるうえで効果を上げていくことができます。

このような学校づくりを進めていくために、マネジメントのあり方が問われているのです。とくに、学校が組織としてのまとまりを創り、内外環境の変化に対応したオーダーメイドの教育活動を、学校に関わる人々の手によって展開していく組織マネジメントが求められ、評価を目標設定や計画に生かしていくアクション（次の一手）を明確にしていくことが課題となっています。学校評価は、その重要な手段なのです。

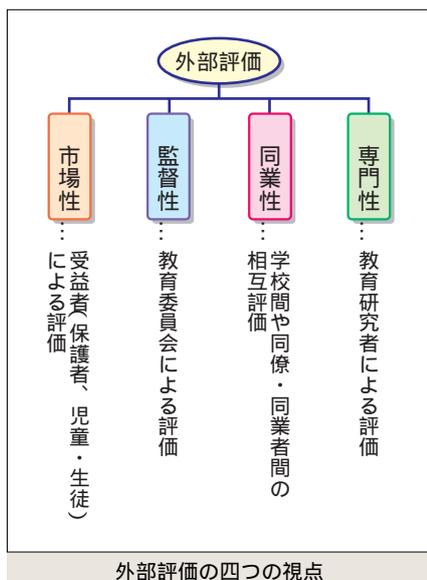


## 外部評価の四つの視点

学校の自己点検・自己評価に加えて、外部評価をどのように導入するかが課題となっていますが、現状では「外部評価」についての理解が浅いように思われます。

外部評価には、四つの基本的な視点があります。一つは専門性で、教育研究者が学校のあり方を調査研究し、その実態を評価するというものです。二つ目は同業性で、学校同士で互いの学校を評価したり、校長会や職員団体がお互いを職業倫理の観点から評価するものです。三つ目が監督性で、教育委員会が行政監督の視点で評価するもの、そして四つ目が市場性で、受益者（保護者や児童・生徒）が自分たちの要求・要望に照らして評価するというものです。この四つの視点を十分ふまえずに、いま外部評価は議論されており、特に四つ目の市場性の観点だけが重要視されているようにみえます。

しかし、教育が市場（受益者）の評価に委ねられる危険性について、もっと慎重に議論されなければなりません。確かに保護者や子どもたちの要求に沿うことは一見民主的に見えますが、往々にしてそのパーセンテージによって、こういう意見が多かった



外部評価の四つの視点

と整理されてしまいます。これでは、サイレントマジョリティーを無視していいのかという問題が残りますし、さらに保護者の考え方が学校教育の専門家である教職員の考え方と違っていった場合に、素人である保護者の考えを優先させていいのかという問題も生じます。

保護者による外部評価はこのような問題を含んでいますので、保護者へのアンケートを行う場合でも、家庭での子どもたちの学習の様子や、どういふことがなされているかなど、学校ではわからないことを聞くようにすべきでしょう。そもそも、保護者は外部者なのでしょうか。外部評価が求められるのは、学校の独りよがりの振る舞いに対する批判であるとは思いますが、そうした事態を招いたこれまでのPTAや保護者の学校への関わり方にも問題の目を向けていく必要があると思います。

## 結果の公表

学校設置基準の中で、各学校は保護者等に対して評価の結果を公表することが義務づけられました。公表に当たっては、何点だったとか、何パーセントだったという結果だけを示すのではなく、その結果を受けて、どう改善していくのかという基本的手だてを示す必要があります。そして、その手だてを講じることによってどうなっていくのかという見通しを示し、さらにその見通しが成り立つ根拠も示さなければなりません。

例えば、学力テストの結果、A校は近隣の学校の平均値に比べて数学が10点ほど低かったとします。この結果に対して、A校では来年度、数学教育をチーム・ティーチングを活用しながら少人数教育と併せて展開する、という手だてを示します。それによって来年度の数学の学力テストの結果はおそらく平均値を何点くらい上回ると予想される、と見通し

を示します。次に、チーム・ティーチングによるきめ細やかな指導によって子どもたちがいよいよ緊張感が与えられ、学力向上につながるという見通しの根拠を示します。このように手だてと見通しと根拠を示してはじめて結果の公表は意味をもつのです。

もちろんそのような手だてや見通しが、保護者から理解され、納得されるものでなければ、依然、学校への信頼は回復しません。だからこそ、納得と信頼の得られる説明が必要なのです。そうすれば、学校の活動に対する協力も得られ、学校は地域とともに生きられるようになっていくでしょう。まさに学校自身が「生きる力」を備えていかなければならぬのです。

## 学校組織開発へ

問題は、今日、急激に進展している社会変化すなわち環境変化に学校がどう適応していくかであり、そのために学校組織の中枢がいかなるビジョンを描き、その実現に向けて組織各部がいかに自律的に活動を展開するかにあります。そのはじめの一步は、誰からでもいい。むしろ、その人を孤立させずに支えられる態勢づくりが要諦です。

学校が自律性を打ち立てていくには、学校（組織）が、社会的な刺激を受け、その刺激に向き合いながら、自己の有様を自ら省察し、その長短得失を見定めて、自らの判断と振る舞いによって自己の組成を組み替えていく組織開発が必要となるのです。確かに学校組織開発を推進していくには、具体的な学校経営実践あるいは施策に即し、一定のビジョンとその実現に至る見通しをもって方略を練っていかねばならないのであり、それを円滑化する手法を磨く必要があります。そうした手法を駆使しながら、学校を柔軟で強靱な「組織」に育てていく学校組織開発の展開が期待されます。



## 有田和正の おもしろ授業発見! ②

# 二軒の弁当屋から「町の違い」が見える授業

白井忠雄先生のみごとな教材開発

教材・授業開発研究所代表 有田和正

## 1. 足がくぎづけになった授業

近頃は、社会科の研究会そのものが少ないため、その中から「これはすごい」という授業をみつけ出すのは至難の技といえる。また、たまたま社会科の授業を参観する機会があっても、1時間全部を見ることは、それこそめったにない。

こういう状況の中で、筑波大附属小学校の研究会で、偶然、白井忠雄先生の授業に出会った。幸運としかいいようがない。ほんのちょっとのぞくつもりで教室に入ったら、足がくぎづけになり、とうとう1時間見てしまった。

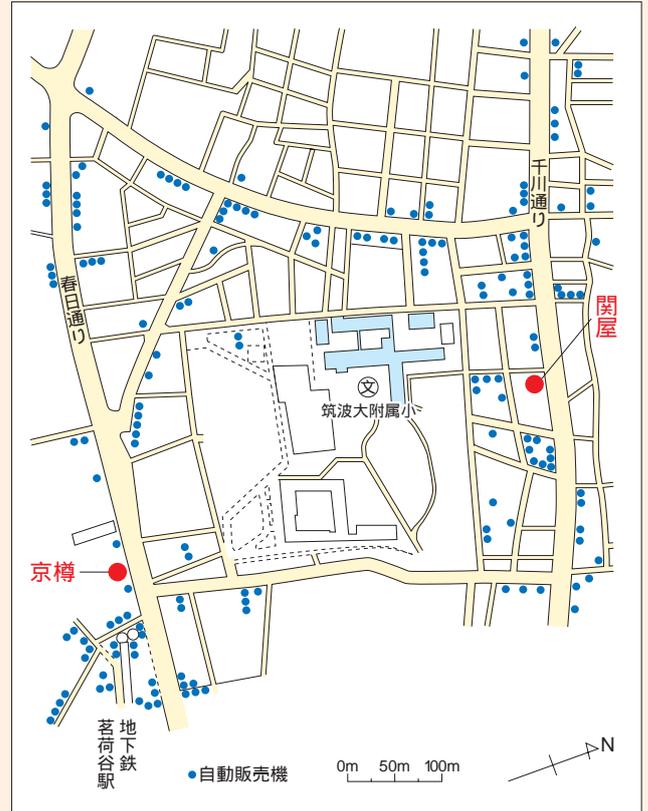
それはなぜか?

わたしが筑波大附属小学校に勤務していたとき、何度か取り上げた「春日通り」と「千川通り」の違いを、白井先生はまったく違った視点から取り上げていたからである。

そのセンスのよさに、舌を7回半巻いた。その授業では、わたしが考えもしなかった「二軒の弁当屋」を取り上げていた。授業を見ているうちに、それぞれの弁当屋が、二つの通りの特徴を明確に表していることに気づいたのである。

断面図でわかるように、春日通りは台地の一番高い所にあり、千川通りは二つの台地の谷を走っている通りである。しかも、千川通りの下は「暗渠」になっており、見ただけでは普通の道に見える。しかし、昔は川だったのである。

交通量がふえ、道が狭いため、千川の上にふたをして通路にし、川の部分は下水道にしたのである。



## 2. 単純明解な教材を使った授業

### (1) 二つの弁当屋の写真提示

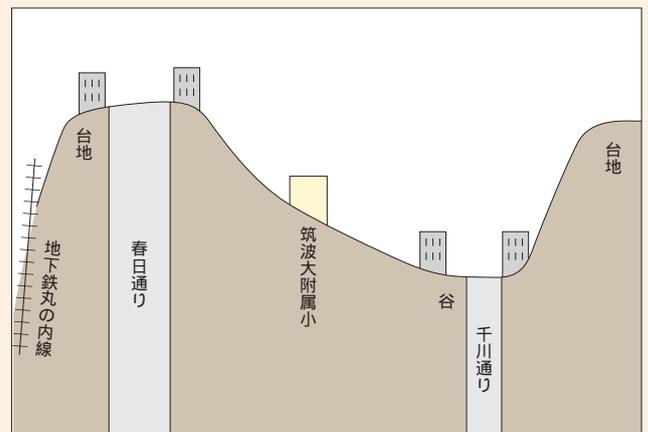
授業は、千川通りと春日通りにある二軒の弁当屋の写真を提示することから始まった。

これは、どこにある店ですか?

と、にこにこしながら問いかけた。

とたん、今まで静かだった子どもたちが、わいわい、がやがやいよいよ始めた。

ふだんからよく観察している子は、かなり自信をもって発言している。そうかと思うと、「まったくわからない」という子もいる。



断面図

地図を真横から見ると上図のようになっている。地図だけでは読者にわかりにくいと考えて筆者が作成したものであり、授業では使われていない。

3年生というのは、「高低差に弱い」という特性があるので、なおさら断面図が必要である。しかし、白井学級には必要がないようであった。

わたしが面白いと思ったのは、店の雰囲気、千川通りにある店と春日通りにある店がわかったことである。二つの通りの違いを、嗅覚といったものでかぎわけているのである。

なかなか鋭い子どもたちだ。

店の名前までもわかる子がいたのには驚いた。恐らく、一度も買ったことはないはずなのである。

一軒は「京樽」で春日通りにあるといい、もう一軒は「関屋」で千川通りにあるというのである。

店の雰囲気、通りの違いをつかませようという教師のねらいに、いとも簡単にせままっているのである。

社会的センスを鍛えるというのは、こういう子どもを育てることをいうのである。

教師は、地図を提示し、「京樽」と「関屋」の位置をさがさせた。このあたりの手ぎわが実にいい。

授業には、リズムとスピードが必要である。臼井先生の授業は、のんびりしているようで、テンポが実にいい。子どもの感覚に合っている。

だから子どもが全員参加し、全員しゃべっている。実に楽しそう。見ているわたしも楽しくてしかたがなかった。

すごいと思ったのは、自由にしゃべらせながら、ポイントどころでは静かにさせ、全員に徹底させている。泳がせる場所としめるところのかねあいが、実にうまい。

ベテランのなせる技だと思った。

## (2) 二つの弁当屋・「京樽」と「関屋」の違い

「京樽」と「関屋」は、どんな違いがありますか？

と、いよいよ本質的なところへ進む。

「関屋」は、写真をよく見ると、男の客が多い。どうして男の客が多いのか、という「はてな？」が自然に出た。これはすごいことである。

「京樽」の方は、逆に女性客が多い。これも「はてな？」になる。

中には、「関屋」は男の客が多いから弁当が大きいのではないか、値段も高いのではないか、と鋭い予想を出す子もいた。この予想が出たところで、臼井先生は、本物の弁当を出した。(写真参照)

## (3) 値段と営業時間の違い

「関屋」の弁当は500円(税込)、「京樽」の弁当は504円(税込)と教師がいう。さらに、「関屋」の営業時間は4時30分～13時30分、「京樽」は9時30分～20時という基本的な情報を知らせた。

どうして営業時間がこんなに違うのか？

千川通りには、工場が多く利用客が多い。決まった客が多くくるといふ。「関屋」の弁当は値段の割に量が多く、おいしいと

いう評判が立っている。

千川通りには、印刷・製本工場が大小合わせて790もあり、そこで働く人の数も多い。つまり、「関屋」の弁当で、千川通りは工場地域という特徴をとらえさせるのに成功したのである。

一方、「京樽」の弁当で、春日通りという台地の通りには、学生や会社員が多く、見た目にきれいな弁当が売れることをつかませた。

「京樽」のある春日通りは、地下鉄の駅があり、レストランや食堂が多いので、「関屋」のような馴染みの客が少ないのではないかという鋭い予想が出て、びっくり。つまり、通りすがりの人が買うことが多いのではないかというのである。こんな予想が出てきた。

通りによって客すじが違うので、客に合わせた弁当屋ができているのだというのである。



「京樽」の弁当



「関屋」の弁当

## (4) 弁当屋から町の違いが見える

二軒の弁当屋から、「町の違いが見える目」を子どもたちに育てたのである。

たった二軒の弁当屋から、町や通りが全く違うことがわかる。つまり、働く人や仕入れの内容も違うし、住んでいる人も違うということに気づかせたのである。あとは、実際に自分の目で予想を確かめることはまちがいない子どもたちだった。

# 親子一緒に農業体験

菅井農業小学校15年の取り組みから

今西祐行（児童文学者）



「一つの花」「肥後の石工」などの名作で知られる児童文学者・今西祐行先生は、作家活動の傍ら神奈川県菅井農業小学校を設立。「自分自身で食べるものを、種から自分でつくって食べる」「親子と一緒に農業をする」という目的のもとに活動。「日本中に休耕田の数だけ農業小学校をつくってほしい」と呼びかけている。

## さあな、今年はいくらもらえるかな

私が現在住んでいる神奈川県藤野町は、相模湖から山梨県道志村に向かう途中の山あいにあります。以前は桑畑がなくて、村の生活はカニコを中心にして成り立っていました。村人がカニコのエサにする桑をしょって谷あいを歩く姿は、「桑のおばけが歩いている」と形容されたそうです。

藤野町は標高400メートルにあるため、水田はごくわずかしかなかった。私が都心からここに引越してきた時に、谷底の田んぼで野良仕事をしているおじいさんに会いました。私は、軽いあいさつのつもりで、「今年の収穫はいかがですか?」と尋ねました。すると、そのおじいさんは「さあな、今年はいくらもらえるかな」と、答えるともなくつぶやいたのです。そのおじいさんのつぶやきを忘れることができた

せん。

人はついつい農作物は自分が作ったものと思いがちです。しかしそのおじいさんは、農作物が野良仕事の成果であったとしても、あくまで天からのいただきものとして捉えているのです。子どもにとって農業体験とは何かを考える場合、私はそのおじいさんのつぶやきを忘れることができませぬ。ここでは、農業小学校のささやかな取り組みを紹介しながら、そのことを考えてみたいと思います。

## 新しい言葉をからだで覚える

菅井農業小学校で作るお米はおかぼ（陸稲）です。水田がないためおかぼを作っているのですが、雑草は水田の比ではありません。そのため農業小学校での農作業の大半は草取りになります。子どもたちと一緒に草取りをしていると、ある子どもが草取りのことを「草を殺す」と言

いました。たしかに草取りは草を殺すことでもあります。子どもたちの言葉がじつに貧弱だと思わざるを得ませんでした。

農業体験を通じて覚える言葉は、身体全体で覚える言葉でもあります。たとえば「ウネをきる」という言葉ひとつをとっても、子どもにとっては初めて聞く新鮮な言葉です。そしてその言葉は、実際にウネをきってみないと理解できないし、覚えることもできません。しかも「ウネをきる」作業は、全神経を集中させて行わないとケガをすることもありません。そうやって覚えた言葉は忘れることはありません。

事前に何も教えずに、子どもたちに「大根をひく」作業をさせてみます。すると、ほとんどの子どもは葉っぱを横にひっぱって大根を折ってしまいます。大根が土の中でどのように育っているか知らないわけです。一度失敗した子どもたちは、次には大根を折らないように、全神経を集中させて「大根をひく」ことを覚えます。



## 大人と子どもが体験を共有する

菅井農業小学校の畑は、山腹の桑畑であった土地を借りて作っています。平地ではなく、海拔400メートルにあつて見晴らしはよく開放感もあります。そういう立地も手伝つてか、大人も子どもも逆立ちをしたりはしゃいだり、ピクニックのような雰囲気もあります。もちろんどの家族も熱心に農作業をするのですが、大人も子どももそれぞれにストレスにさらされているのでしょうか。

よく学級崩壊という現象が問題になります。私は学校崩壊や教室崩壊より以前に、家庭の崩壊ということがどうか気になります。現役の小学校の先生方に話を聞くと、家庭の崩壊が学校に持ち込まれることが多いそうです。農業小学校を始めた動機は、家庭教育の立

て直しというふうなものではありませんが、そういう問題が農業小学校に持ち込まれることさえあります。

農業小学校に参加している家族から異口同音に聞く言葉は、「農作業をすることによって親子共通の話題ができた」ということです。日頃は、大人と子ども間に共通の話題がないというのです。収穫した麦からうどんをつつ時などは、前の日から翌日までうどんづくりが家庭の話題になるそうです。

## 瓜づくりよりも土つくれ

リルケは、美についてこんなことを言っています。「美とは付け加える何かである。美そのものを作ることはできない。」

「美とは付け加える何かである。美そのものを作ることはできない。」

リルケのこの言葉を私なりに解釈すると、「人間が作ることはできない。美を容れる器を作ること」であると思っています。

このことに倣つて子どもの教育にあてはめてみると、「どんな優れた教育者も子どもを作ることにはできない。子どもを育てる器（環境）を作ることが教育者の仕事」であると言えるのではないのでしょうか。その器とは家庭であり、学校であり、社会であるのです。



さつまいも植付け作業

私の父親は経済的には成功したとは言えませんが、常日頃「瓜づくりよりも土つくれ」と語っていました。目先の成果を求めて、花や実ばかり追い求めるのではなく、作物自身が育ちやすい環境を整えてやるのが一番たいせつであるということです。

## 農業こそ教育そのもの

あるJA青年部に招かれたとき、「農業体験ははじめを克服できるか」という質問を受けたことがあります。私はその質問に対して、「瓜づくりよりも土つくれ」という父の言葉を繰り返しました。農業体験を何かの手段として捉えるのではなく、子どもを育てる器（環境）そのものとして捉えてほしいのです。

よく知られているように、カルチャー（文化）という言葉はアグリカルチャー（農業）からできた言葉であります。農業体験を教育の手段として捉えるのではなく、教育そのものとして捉えてほしいと思っています。

私の望みとするところは、耕作が放棄された田畑をすべて耕して、全国の隅々で農業小学校が開かれることです。ぜひそのような農業体験活動を全国で実施してほしいと思います。

（注）全国で開設されている農業小学校については  
農文協のホームページ  
<http://gakkou.ruralnet.or.jp/list02.html>  
をご参照ください。

なお、菅井農業小学校は今西先生療養中のため、現在休校中です。

## 北から 南から

## 千葉県

子どもいきいきプラン  
千葉市農山村留学

千葉市教育委員会指導課

本市では、平成13年度から「千葉市子どもいきいきプラン」がスタートし、市内小学校6年生を対象に、「生きる力」を育む多様な体験活動を、長野県の農山村で実施している。当初、7校137名で実施した農山村留学は、本年度で3年目を迎え、21校844名と規模を拡大した。

この農山村留学は、子どもたちに「郷土への誇りと愛情」を育むため、次のことをねらいとしている。一つに、留学先で多くの人と出会い人間関係を広げ、他人を思いやる心や社会性を育むこと、二つに、様々な体験を通して自主性・創造性を伸ばすこと、三つに、ゆったりとした時の流れの中で、他校の友達と生活を共にして自分の長所に気づき個性を伸ばすこと、である。

夏季休業中に4泊5日の日程で行う活動では、炭焼き体験や農業体験、川下りなどの現地の特色を生かした様々な活動を体験したり、現地の小学生との交流会やホームステイなどを通して人々の人情や機微に触れ、豊かな感性や積極性が育まれている。

「わたしが何よりもうれしかったのは、最初は自分から声をかけられなかったけれど、だんだん自分から声をかけられるようになったことです」「最初はとても不安だったけど、村の人たちのおかげで最後は、千葉に帰りたくなくなりました。これは、農山村留学に参加した子どもたちの感想である。親元から離れ、豊かな大自然の中で、他校の友達とグループを組み、生活を共にしながら、不安や困難を乗り越え、今までにない自分を発見する貴重な体験になっている。

こうした経験を、2学期からの日常の生活や学習に大いに生かし、自らの人生を切りひらく「生きる力」を身につけ夢を広げてほしいと、心から願っている。



## 北海道

Energy Overflow Company  
～活力あふれる会社～占冠村立トマム中学校校長  
大久保清人

本校のある占冠村は、「自然体感占冠」を地域活性化のスローガンとしている。豊かな自然を生かし、21世紀を担うトマムっ子に「生きる力」を育むことをねらいとして、平成12年度、本校の「総合的な学習の時間」は地域学習を核にしてスタートした。

「地域の環境美化」「地域のPR活動」「地域に関する新聞作成」「姉妹都市アメリカ・アスペン市との交流」などの課題について、子どもの意欲を引き出すことを柱として取り組みを進めた。

それぞれの活動は、全学年を縦割りにし、「総務部」「企画部」「環境美化部」「広報部」の4部で構成する「Energy Overflow Company」（子どもたちによるネーミングで、活力あふれる会社の意）が組織的に推進した。子どもたちに企画・提案・実行・反省という流れを意識させ、役割と責任を明確にし、各部が連携して課題に取り組んだ。活動が進むにつれて、子どもたちの目は地域に向けられ、やがて、「トマムのよさを知ってほしい」という強い願いにつながっていった。

アスペン市との「姉妹都市交流」では、アスペン市の子どもを本村に迎え、スポーツ交流・合同授業・日本文化体験などを実施して互いの文化を学び合った。その後、2年生全員がアスペン市を訪問。異なる言語や文化に対する理解や自国のよさ、地域のよさを再認識した。

「Energy Overflow Company」が1年目を終えた時、「自分の意見がもて自信がついた」「視野が広がった」「トマムやアスペンのよさがよく理解できた」と語る子どもたちの瞳は輝いていた。

本年度、本校の「総合的な学習の時間」の実践は4年目を迎える。「国際理解」「健康」「勤労栽培」と3年1サイクルのテーマ学習を設定、「意欲化と価値ある体験」を柱とし、進化・充実を目指している。



## 沖縄県

## 心の叫び! 平和のシンボル発信!

石川市立伊波中学校  
長嶺加恵美

梅雨明けの6月、伊波中学校体育館では、「平和の音（吹奏楽・女声合唱）平和の声（朗読劇）平和の思い（平和新聞）平和のシーン（背景）平和のスクリーン（映像）平和のシンボル（絵・キルト）」と八つのパーツに取り組み、そのパーツを基にひとつのシナリオにまとめ、平和コンサートという形態で平和のメッセージを発信した。

様々な場面で見せてくれた伊波中っ子379名の表情に、未来の明るい沖縄の展望を垣間見た。

今年で4年目を迎えたこの企画。沖縄戦で亡くなった戦没者の御霊を慰め、「自分達に託された役割とは何か」を生徒一人一人の心に問いかけた1時間40分に凝縮された内容であった。

平和の尊さを希求する心情を築いていこうと声高らかに、全校生徒一同に宣言文を発するあの瞬間を誰もが忘れない。

保護者をはじめ、多くの地域の方々に参加され、生徒に激励のコールを送ってくれた場面も印象深く残っている。大勢の聴衆と共に「平和」というテーマを共有し、考える場を持てたことがこの上ない喜びである。

平和コンサートを通して、一人一人が平和の大切さに気付き、沖縄の歴史をつくる主体者として、明日からの生きる糧に成り得たことを確信したい。

結びに、伊波中学生徒による平和宣言文の一節を紹介する。

21世紀に美しい地球を存続させるためにも、戦争の悲惨さを忘れることなく伝えていこう。いろいろなものに愛情を持って接していこう。お互いを認め、歩み寄ることができる世界を築こう。未来に向かって、平和の尊さを希求し、輝かしく精一杯生きることを宣言します。



## 兵庫県

## 校庭の芝生化トライアル

神戸市立桜の宮小学校校長  
夜久恵子

平成13年度、神戸市は「神戸21世紀・復興記念事業」を行った。その事業の一つとして、神戸市在住の一主婦の提案である「百年後の子どもたちに残せる夢プランとしての校庭芝生化」が採用された。

本校は、校庭がぬかるみやすく、石も多くて、以前から改修工事が懸案となっていたが、震災以降、市の財政難もあって改修申請は却下され、なかなか実現できないでいた。こんなとき、「校庭の芝生化」という文字通り夢のようなプランが提案されたのだった。

この事業を知って、改修と芝生化が実現されるのならば一石二鳥と、このプランに手を挙げたのが取り組みの動機である。緑の芝生に覆われた校庭で子どもたちが遊ぶ姿を想像するだけでも、心躍るすてきなことに思えて、早速希望したのである。

ゴルファーの緑化推進協力会から1,000万円の財政支援をいただき、NPO法人芝生スピリットの指導のもと、平成13年7月に芝生化を実施した。校庭の約3分の1、2,350㎡を撒き芝工法で行った。試行段階なので、一年間は施工業者が水やり、施肥などのメンテナンスに当たる約束でスタートした。そして、10月の運動会には、緑でふかふかの芝生地が完成し、お披露目をしてみんなで祝った。平成14年度からは、芝生クラブを立ち上げ、月一回、教員、保護者、地域、芝生スピリットの方々20名ほどが集まり、芝生の世話に取り組んでいる。

今年の6月には第二期の芝生化を実施、約440㎡を撒き芝と張り芝工法で行った。今回は、「総合的な学習の時間」の中で全学年で作業に取り組んだ。10月には、芝生の上で和太鼓クラブの発表や紙芝居など楽しいイベントを計画している。芝生の観察や水やりも学びの一つとして、心も体も芝生のように丈夫に豊かに育って欲しいと願っている。



## 小山内美江子 『ボス』と慕われた教師』(岩波書店)

### 熱血漢 小椋への鎮魂譜

評者 加藤勝美(フリージャーナリスト)



教職三六年、小学校教師としてガリ版刷りの郷土読本を作り、七〇年代には組合専従として組合運動のリーダー、八〇年代の荒れる中学校では教頭、校長となつては登校する生徒たちを校門前でハイタッチで迎えたり、「ノーチヤム制」など数々の新機軸を導入、校長会会長も務めた主人公小椋英史は「走つてから考える」生き方を貫いた男だった。

一九三六年帯広生まれ。停年後、著者(TVドラマ『3年B組金八先生』の原作者)が創設したカンボジアに学校を作るNGOに参加、その時点で、学生結婚だった愛妻は十年前に病没、二人の子どもは独立していた。しかし、参加の二年後に現地で急死、それもその少し前に若い仲間たちに「青春真っ最中」と宣言したばかりだった。六〇を過ぎて、不整脈や高血圧などの持病を抱えながら、灼熱の異境で若者たちの先頭に立つ活動ぶりは、小椋の一つ下の年齢である評者には「歳のほども弁えぬ無茶」としか思えない。

それは司馬遼太郎の『坂の上の雲』

などに刺激されて高度経済成長を担った企業人の姿と重なる。現役時代は当然のことながら家のこと、子どもの教育は妻任せ、夜に学校の同僚や部下を家に招き、妻がその接待をした。「奥さん離れができていない」が「思ったことをやりたいようにやってきた」男。服装にも気をつかい、ファッション雑誌から抜け出たようなダンディぶり。いつまでも少年の心を忘れない。良くも悪くも「エエかつこしいの目立ちたがり屋」だったかもしれないが、まわりの人間も巻き込んで目標を実現していく姿は魅力的である。他方、小椋と同じような教職経験者が彼について書けば、どんなものになっただろうかという思いは残る。

停年後はボランティアなどせず、趣味や海外旅行に精出す生き方もある。どっちが自分に合ったものか考えるよすがともなる一冊である。「早く死なせたかもしれない」という著者の小椋への鎮魂譜でもある。

## 陰山英男 『学力は家庭で伸びる』(小学館)

### 陰山流 学力向上策の提案

評者 佐藤晴雄(帝京大学)



陰山メソッドが保護者や教師にうつける理由は何か。まず、陰山氏の指導を受けた卒業生が難関大学を突破したという実績があるからであろう。次に、指導方法が「百ます計算」に代表されるように決して複雑ではなく、どの教師(または保護者)でも取り組める指導法だからであろう。これらは陰山メソッドの特徴だと言える。もう一つ特徴を加えれば、陰山氏は家庭との結びつきを重視している点が指摘できる。

本書は、そうした陰山氏が家庭に発信した教育書である。内容は、「学力が上がる16か条」「会話力がつく13か条」「自分でできる力を育てる12か条」の3章から成る。いずれの章も、著者自らの体験を交えて具体的に書かれているため説得力があり、本書の通りに子どもを育てれば学力が向上しそうな気がしてくる。ただ、一読したところ、従来の家庭教育書と大きく代わり映えがせず、陰山氏らしさがあまり感じられないという読後感も残った。

また、陰山氏の学力観がいま一つ理解しにくいようにも思った。この点については高久清吉氏も指摘する。高久氏は陰山氏の学力観が曖昧である点と理念を軽視している点を問題視しているが、『教育展望』2003年7・8月号)、本書においても冒頭で、学力の根本は生命力であると述べるにどめ、その明確な定義を試みていない。

察するに、陰山氏の言う「学力」とは、教科のテスト問題が解ける力、あるいはできないことができるようになる力を基盤にした学習能力(難関大学を突破する力も含む)のことだと解せられる(ただし、この学力は思考力や想像力などに発展するものと捉えられているはずである)。このような観点から、陰山氏は多くの保護者や教師のニーズに合った学力向上策を提案したように思う。逆説的に言えば、陰山メソッドが広く受け入れられたのは、その学力観の曖昧さ故であり、言い換えれば、一般の人が考える本書の学力を想定しているからなのである。



# 「知」を創る学習指導

その「創られた知の獲得」

角屋重樹（広島大学教授）



子どもは「知」を創る存在です。つまり、子どもは生まれて以来、いろいろなことを経験し、それらを整理して、自分なりの知識を創っていきます。

子どもたちがこのような「知」を獲得していく過程にはいくつかの段階があり、それぞれの段階に応じて教師が適切な働きかけをしていくことが重要になってきています。

子どもが創造し、獲得していく「知」には、創られた知、知の創り方に関するもの、人との関わりによる知、の三つの要素があります。

今回は、創られた知、すなわち既存文化の中の知の獲得ということについて考えてみましょう。

人間が知を創り出すためには、まず核になる知識を既存文化の中から確実に獲得していかなければなりません。その際、知識を覚えること自体を目的化せず、その価値や意味をはずりさせることが大切です。

既存文化の中の知を獲得するために有効な方法としてドリル学習があります。ドリル学習では反復が基本であり、幼児や小学校低学年は飽きずに取り組みますが、中・高学年や中学校になると、「何でこんなことをしなければならぬのだらう」という意識が出てきます。強制的にやらせることが問題です。

これについては、尾道市立長江小学校の実践が一つの解決策を示唆しています。市販のドリルは1回に10題が一般的ですが、長江小は5題です。子どもが目標を立てて学習するドリルにたくさん問題が必要ありません。また、単に正解率を上げるだけでなく、解き方をいろいろと工夫するというのが長江小の特色です。自分で問題を創るという内容もあります。このような工夫によって、本来子どもがもっている「知」を創る喜びを実感することができるようになっています。

「真似る」ということも既存文化の獲得の大切な方法です。学習の場では意外に軽視されていますが、真似るということは、人の行動の様子を見てその意味を考えることで、大切な学習活動です。例えば生活科の活動などで、お年寄りが竹馬を作っている様子から、なぜ足を乗せるところは針金でくるのだからかなどと、絶えずその意味を引き出しながら作り方を学ぶといったことがこれから重要になってきます。

今、自信を失った子どもたちが、引きこもったり、いじめなどの問題を起こしたりしています。大人社会も同じです。自分が自覚して知識を創っていくことによって、やればできるという自己効力感が得られ、自分に自信がもてるようになります。

読者のページ

## Educo Salon

【エデュコ サロン】



ご意見・ご感想をお寄せください  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10  
教育出版 Educo編集部  
FAX : 03-3238-6975  
e-mail : u-nakajima@kyoiku-shuppan.co.jp

地球時代の教育情報誌エデュコの創刊おめでとうございます。一気に読み終えて妙な親しさと安らぎを覚えました。私も小さなビジネス学校を営んでいる関係上、様々な教育情報誌を日々手にいたしますが、貴誌のコンセプトがとても自然で共鳴し、感動いたしました。こんなに心豊かであたたかい教育情報誌の誕生が嬉しくて拙筆をとりました。21世紀の道祖神としてご発展を祈念しております。（埼玉県 中井芳英）



第1号を興味深く読みました。中でも、「ボランティアってなんだろう?」「学力から人間力へ」は大変明解な内容で勉強になりました。「2学期制」については教師や市民（保護者）の反応、賛否などの生の声を聞かせていただきたかった。総じて読みやすく構成されていたので、よい勉強の機会になりました。（神奈川県 金子肇）

堀田 力さんのインタビュー「ボランティアってなんだろう?」を読み、阪神淡路大震災が、それまでのボランティア活動の意図合いであった「困っている人の役に立ちたい」から「自分探し、または生きがい探し」へと変化したきっかけを生んだと言われたことを思い出しました。学校教育は生涯学習の基礎を培う営みですから、子どもたちが自分らしく生きようとする姿をそっと後押ししてあげることが大切だとの思いを一層強くもちました。

また、学力低下についても論じられていましたが、その指摘の過半は教師の指導力低下に比例するとも言われています。学力向上に向けた取り組みは焦眉の急ではありますが、まずは教師自身が実践的指導力を身につけることが急務であり、子どもにとって魅力ある学校創造に努めてほしいものです。（北海道 笹原志郎）



審査委員

委員長 有田和正(教材・授業開発研究所代表)  
委員 川崎 洋(詩人・脚本家)  
" 児島邦宏(東京学芸大学教授)  
" 角屋重樹(広島大学教授)

大賞



みんなちがって、同じ空の下

動物も木も花も人も同じ空の下。分けなくていい。国なんてなくていい。みんな同じだからケンカしなくていい。今もどこかで空がくもってる。傷つけ合わなくていい。戦争はいらない。

小山菜月(東京都・小学校6年)

【評】 どうしてこうも、人は傷つけ合うのだろう。このメッセージに私たち大人が、どう応えていくか。くもった空を晴らしていく責任を、大人が問われています。この絵のように、全てが思いきり飛びはね、自分を発揮できる世界をつくっていかねばなりません。

わたしの地球となかよし「メッセージ」

入賞作品発表

本年5月、小学生・中学生を対象に、第1回「わたしの地球となかよし」メッセージの募集を行いました。これは、地球環境や地球上のあらゆる命を大切にしていこうというテーマについて、写真(絵・イラスト)と短文でメッセージを伝える新たな表現形式による公募企画で、インターネットを通して直接応募できるシステムも採用しました。

2か月間という短い応募期間でしたが、海外からの応募も含めて全国から800点を超える作品が寄せられました。ご協力ありがとうございました。7月11日に審査委員会を開催し、次の通り入賞作品が決まりました。どの作品も子どもらしい視点や発想から「地球となかよし」というテーマをとらえた力作ばかりです。地球の未来を担う子どもたちの心に響くメッセージにぜひ耳を傾けてください。

なお、入賞作品のほかに、「学校賞」として常葉学園大学附属橋小学校と尾道市立長江小学校、「グループ賞」として氷見市立宇波小学校6年の仲間と東広島市立西条小学校4年の仲間が選ばれました。

選考経過

全作品の中から、4人の審査委員が入賞作品候補をそれぞれ20点選び出し、その後、協議により「入賞作品」31点を決定いたしました。この時の視点は、作品のメッセージ性を最も重視し、訴えるものが鮮明かどうかを中心に話し合っていました。

入賞作品31点を選ばず作業は比較的すんなりといきましましたが、この中から「特選」を選ぶ段階になると委員の意見が分かれて難航しました。それだけ各作品の優劣の差がほとんどなかったということですので。議論の末、最終的に4点を選定に決定、その中の小山菜月さんの作品「みんなちがって、同じ空の下」が大賞に選ばれました。(審査委員長 有田和正)

特選



アラグアネイの木の願い

私は、ベネズエラのカラカスに生えているアラグアネイの木です。何年前くらいからでしょうか。目の前の道を通る車の数が増え、私は、毎日、車に排気ガスを浴びせられるようになりました。それは年ごとにひどくなりました。排気ガスのせいで、私のつやつやした葉っぱは縮れ、幹もごつごつとひび割れました。最近私は、一番地球にひどいことをしている生き物は、人間なんじゃないかと思うようになってきました。皆さんこの地球は、私たちを育ててくれているんです。地球は、私たちの親みたいなものです。きれいな空気・川・海などがなければ地球上の生物は、生きていけません！だから皆さん、どうかしてこの地球を美しく、すばらしい星にしましょう。

竹内浩美(ベネズエラ・中学校1年)

【評】 日本の反対側のベネズエラから「緑を守れ」とのメッセージです。グローバルな問題だと実感しました。「どうかして」乗り越えていかねばなりません。私達の知恵と努力で。



手のぬくもり

今、私たちは総合学習で「萩のすてき」を探しながら、大切なことについて考えています。観光地ではなく、身近な人達の手の中に、私たちはすてきなふるさとを見つけたのです。これは、消防士さんの手です。毎日、ロープをつたい激しい訓練をしているまめだらけの手。人の命を救うために一生懸命がんばっている手です。手には、人生があるんだなあと思いました。私たちは、そこにあるのだけでも、見ようとしなかったり、気付かなかったりすることが、実に多いということもわかってきました。足元を見つめ、ふるさとへの思いを一枚一枚写真にたくして見ます。その思いを多くの人に伝えたくてしかたがありません。

萩市立明倫小学校6年1組一同(山口県)

【評】 手の中に、人生を読みとり、ふるさとを見つめる。しかも「ぬくもり」として。手と手のつながりの向こうに、地域と少年の未来がかいま見えます。この写真のように。



森は動物たちのお母さん

私は、森が大好きです。町みたいに、ざわざわしたところはありません。新高山は、木がいっぱい生えていて、すずめ、はとがよく来ます。森のいいところは、自ぜんのかうきをはこんでくれたり、森に住んでいる動物達を守っていたり、水をためたりするところだと思っています。私は、森に住んでいる鳥やたぬきやさるのお母さんは、ちゃんといけるけど、本当に本当は、森も生き物みんなのお母さんだとわかりました。森の中にいるときや森の中で遊んでいるときに、私は、地球が大好きだと思います。しずかな森だと、その中でたくさん命を育てているすてきなお母さんです。

岩山美菜穂(広島県・小学校4年)

【評】 森をしっかりとだきしめている少女(おそらく岩山さん自身でしょう)の姿に、中でもその手のやさしさと力に、森をおもう心と守る決意をみてとることが出来ます。

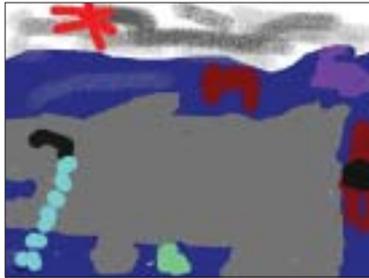


地球の仲間を大切に

この前私が海に行くと、ヒトデにつり糸がぐるぐるからまって死んでいました。心ない人たちのせいで生き物たちがぎせになる事はゆるせないと思います。ビニールを飲みこんで死んでしまった、海ガメや魚などのニュースもたびたび聞きます。私たちが少し気をつけるだけでこうした悲しいでき事はふせげはらずです。

トラヤサイなども、人間のせいでたいへん数がへってしまい、絶滅のきけんがあるそうです。この地球でいっしょにくらす仲間たちをもっと大切にしていかなければならないと思います。

脇田彩衣 (大阪府・小学校4年)



くじらのなみだ

海には、ぜつめつしそうな魚や、ぜつめつした魚がいます。今、しぜんが、このよからなくなりつつあります。

くじらが「くるしい」となきながらうたっています。くじらのなみだが、海にしみています。空が、黒色ににじんでいます。しぜんがなくなると、このよが、ほろびます。せんぞが、ずっとまもりつづけてきた、しぜんがなくなってしまう、次のしそんに、しぜんをバトンタッチできません。

今でもおそくはありません。今もっているしぜんをずっとまもって行きましょう。

濱田祥平 (静岡県・小学校3年)



なかよし

おとうとのあつくんと のらねこと わたしで、むしとりにいきました。

多田歩加 (広島県・小学校1年)



ゴミ物語

「ポイッポイッザブン。」

またか！ 川に住んでいる生き物たちは思いました。人間がゴミを投げたのです。

最長ろうのニッポンバラタナゴは、「人という生き物は、なぜ自分かかってに、ゴミを投げたりするのだろう。」と思いました。「あっ。またぎせい者が出るぞ。」ゴミのつまったふくろを持った人間がやって来ました。

「みんな、にげろ！」その子が目の前に来たその時です。子どもは、なんと川に落ちていたゴミを拾ってくれたのです。

ニッポンバラタナゴは、「こんなやさしい人は初めて見た。」とうれしくて体をバラのように赤くそめました。

浅尾信央 (福岡県・小学校4年)



ゴミを、森にすてないで！！

わたしは、テレビやパソコンなどで、森が火事になったということをよく聞きます。わたしの家のそばに、森があります。とてもきれいなところですが、わたしが生れる前に、火事があったそうです。木や動物が、燃えたり死んでしまったといっていました。わたしは、こんなきれいな森が火事になったのは、しんじられませんでした。

でも、おじいさんが、そのことをくわしく教えてくれました。そして、ほんとうにあったのだということをしりました。でも、今はほとんど、きれいな山、川、森などはありません。なぜかという、わたしたち人間が、森、川、山などに、すぐに、物やゴミをすてしまうからです。なので、きれいな森林は、もうほとんどうしなわれてしまったのです。

この絵は、森に、人間がゴミ(たばこ)などをすててしまって、動物(うさぎ)がこまってしまって、助けを求めている絵です。みなさんも、森、川、山などに、ゴミを捨てないで下さい。

青木仁美 (静岡県・小学校3年)



ちきゅうをふく

わたしは、ちきゅうと仲よくすると、"ちきゅうをよごさない"のだと思います。だから"ちきゅうをふく"絵にしました。

「どうですか？」

阿部桃香 (東京都・小学校2年)



ゴミヤカンでこんな物にへんしん

ゴミヤカンでこんな物が作れることを総合の学習でやってみて、初めて知りました。

わたしの住んでいる地域の干潟には、カフトガニやカニドンドコ、ヤドリカニなどが住んでいます。

その干潟に行くと使えそうなゴミヤカンをたくさん拾ってきました。

そのゴミヤカンで干潟に住んでいる生物たちを作り、干潟のへやが、できあがりました。

手がきれいなり、少しいやなこと、きつこともたくさんありましたけど、それの一つ一つがこえてきました。するとそのあと、とてもよい作品がいっぱいできました。

でも、こんな作品ができる材料が干潟に落ちていたことが、作ってみて悲しかったことです。

中西沙織 (福岡県・小学校4年)



ぼいすてをやめよう

ある日おんなのこがかんをみつけたよ。そして、「だれがすてたんだろう」と、おもいながらかんをひろいました。そして、おんなのこは、かんをじっとみていました。

だから、これからはぼいすてをやめよう、おもいました。みんなもぼいすてをやめよう。

鈴木優子 (静岡県・小学校3年)



公園の草とりとごみひろいをした

「こちらは公園せいそうです。ごきょうりよくおねがいします。」と朝からほうそうがなったので、南公園に行きました。ごみ、草をとるのは、とってもたいへんです。三つも公園があるので、ごみや草をとるのがたいへんだったけど、わたしは、心の中で、「もし、ずっと、ごみや、草をひろわなかったら、すごいきたない公園だろうな」と思いました。草やごみを、いっぱいひろったりしてたりしました。

三つの公園がきれいになって、うれしかったです。小さい子も晴れの日はおそびに来るといいなと思っています。

広井美和 (山形県・小学校3年)



地球があるから遊べるんだ

ぼくはこんなふうに遊んだりできるのはあたりまえだと思ってたけど、ふりかえてみたら地球がないとこんなふうにはサッカーやスポーツができません。地球を大じにしないとイケないのです。今、ぼくはサッカーが大好きです。ぼくは、サッカーができる地球がとても大好きです。  
 緑があるから、この土があるんです。  
 ぼくたちが、のびのびしてイけるのは、この地球にたくさんの自然があるからです。そして、ぼくたちにはこの地球がひとつなので、どんどん緑をふやし、すみやすくしないとイケません。ぼくは今、おもいっきりサッカーができるこの地球が大好きです。

加賀見公和 (広島県・小学校4年)



あいさつ

いろんな人にいるいるないあいさつをしてみよう。きっといい気持ちになるから。  
 「ありがとう」だったら、「どういたしまして」って、言葉がかえってくるだろう。

田代裕子 (静岡県・小学校4年)



日本のみんな ゴミ捨てやめよう

私たちの住む校区にある曾根ひがたの「クリーン作戦」に行った時のこと。そこには、たくさんのゴミが捨ててあったよ。こんなにたくさん捨てるなんてひどいです。ゴミを捨てたらゴミのふくろが山ほどできたよ。  
 私は、ゴミを捨てる人が少しでもへってほしいと思いながら働いたよ。  
 ひがたの生き物もゴミがなくなったらうれしいと思うよ。ゴミを捨てるのはかんだんだけ、ゴミを捨てるのは大変なんだよ。これからは、ゴミを捨てるのをやめようよ。ぜったい、海のいのちを守ることは、私たちのいのちを守ることにつながるんだよ。

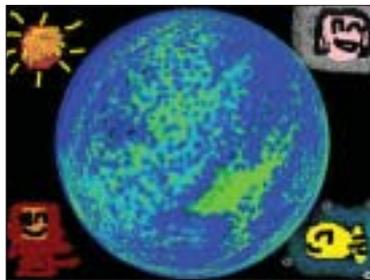
比田勝由夏 (福岡県・小学校4年)



おじいちゃんおばあちゃん大好きだよ

私は、朝、学校へ行く時たくさんの近所のおじいちゃんやおばあちゃんと会います。近所のおじいちゃんやおばあちゃんは、私が「おはよう。」と言うと必ず会話して、「ふみちゃん、元気じゃのう。おはよう。」と言ってくださいます。  
 私は、近所のおじいちゃんやおばあちゃんの言葉がとても優しく耳にひびきうれしい気持ちも広がっています。私の心まで温かくなります。近所のおじいちゃんやおばあちゃんは、9才の私の6倍も7倍もたくさん生きているのに少しもえらそうではありません。とても優しいです。おじいちゃんやおばあちゃんに、会っている時温かくなり、生まれてきてよかったと思います。  
 私にとって、近所のおじいちゃんやおばあちゃんは、一人一人がとっても大事な人になっています。

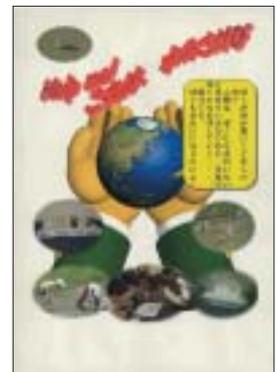
加納文子 (広島県・小学校4年)



地球は、きれいに

地球と仲よくしている子どもや、犬、魚たちが平和に暮らしています。  
 ある日、子どもたちが、地球に言いました。「地球には、ゴミがたくさんおちていたよ。このあいだ川にいったよ。」すると、地球は、「ぼく、残念だよ。」と言って、泣いてしまいました。「どうしよう。」子供たちはこの言葉を聞いて、「わたしたち、拾ってくる!」と言って、拾いにいきました。「あー、やさしいなー。きれいになるのが、楽しみだなー。」そのころ、みんなは...「汚い!! 必ず全部拾うぞー!」  
 そして、みんなが拾いおわって、地球に言いました。「きれいになったよ! 地球さん!」「ありがとう!!!」

増子沙輝 (静岡県・小学校4年)



Help me!  
 これは、水のさけび

ぼくが何か悪いことをしたの?  
 人間は、ぼくたち水がいけないと生きていけないのに、平気でぼくたちを汚して行く...  
 助けてよ。  
 ぼくもきれいになりたいよ!

胡麻裕宜・木山美優・山戸海里・宮西旭美・宮脇杏奈 (広島県・小学校4年)



玄海イワレンゲを守ろう

玄海イワレンゲは、私たちの学校のすぐ近くにある島に自生している植物です。玄海イワレンゲは、弁慶草科レンゲ属の日本原産のサボテンです。北九州市門司区の花辺が原産地と言われています。わずかな岩のひび割れにたまたまほこりやちりの場所に自生しています。最近、志岐にもこの植物が確認されています。  
 私たちの学校は、希少なこの植物をいつまでも生きていられるようにみんなで守っています。「学校のすぐ近くで、原産された植物を育てることで、地域を知り、自然を愛する心を持って欲しい。」と期待されています。

西村知美 (福岡県・小学校5年)



生き物はみんなお母さんが好き

私が一番うれしいのは、母といっしょにいる時です。私は母といっしょにいると、しぜんと気持ちがあたたかくなって楽しくなります。母といっしょにいると子どもたちはみんな安心して幸せだろうと思います。  
 母は、私を生んで育ててくれ、いつもやさしく見守ってくれています。朝起きてお母さんの顔を見るとほっとします。お母さんは私に「よくがんばってるね。」とはげましてくれます。  
 世界中の生き物たちが、この地球上で、お母さんから生まれ、お母さんに大切に育てられます。私はそんな地球が大好きです。世界中の生き物にはみんなお母さんがいます。その生き物にとってお母さんはかけがえのない存在だと思っています。

秋田麻衣 (広島県・小学校4年)



地球を守る私たち

地球は、私たちを守ってくれた。次は、私たちが守らなければならない。地下鉄をほるときだって、いたい思いをしたと思う。それに、私たちの住む所を作ってくれた。それに、今の地球には、ごみがいっぱいだから、地球が泣いている。私たちがごみをふやしているのだ。ごみがこのままふえ続けると、地球がデコボコになってしまう。生ごみを、へらすためには、のこさず食べること。川は、地球の一部分だ。川にもごみをすてないことだ。空気は、地球の大切なものだ。車よりも自転車や、歩いて動く方がいい。地球を守るのは、人間の私たちだ。

赤間明衣 (宮城県・小学校4年)



### きれいな川、住み良い環境

今、川や海がゴミなどできたなくなっています。私がこの絵でみんなに伝えたいのは、一人一人ゴミを川に捨てずに、ゴミ箱へ、リサイクルできるものはリサイクルへということです。

まずは私からそのことを心に入れて生活していきたいです。

タマちゃんも喜ぶきれいな川。住み良い環境にしていきたい。

大塩月野 (静岡県・小学校6年)



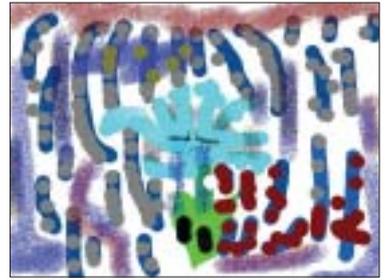
### ごみは捨てても消えないよ

夏のある日、散歩をしていた。空き地に、空になったインスタントラーメンの容器が捨てられていた。この容器は、この後どうなるのだろう。きっと誰かが捨ってくれるまで空き地の中だろう。

空き地はゴミ箱ではない。

捨ててもすぐには回収されないし、消えるわけがない。どんどんたまっていくんだ。人が捨てたごみは、残って汚くなるだけなんだ。

平 世良 (栃木県・小学校6年)



### 酸性雨の怖さ

ポタポタ、ザアアアア。雨がふりだしてきました。すると、花達が泣き出しました。「きゃあー。酸性雨がふってきたわ。」

「みんな気を付けて。」

実は、これは酸性雨だったのです。花達は酸性雨がふってきたから、だんだん体に白いてんがでてきたのがわかりました。花達が痛がっています。酸性雨の怖さはそれだけではありません。

コンクリートまでとがすのです。酸性雨ができた原因は、工場からのけむりで、人間が作り出した物なのです。

だから、これから一人一人にできることを考えて、少しでも酸性雨をへらしていきたいです。

河西春菜 (静岡県・小学校5年)



### 地球は泣いている

最近のニュースを見ると、心が痛む事があります。それは、地球の環境問題です。最近では、地球温暖化以外にも、オゾン層の破壊や酸性雨、森林破壊も大きな問題になっています。僕は、まるで、地球が泣いているように感じました。身の回りを見てみると鉛筆、机、壁...。木材を使った製品がいっぱいあります。僕は、その一つ一つを大切にしていきたいです。資源をリサイクルして、少しずつ、ほんの少しずつ、この地球に住まわせてもらっているかわりに、恩返しをしていきたいです。僕は、地球の環境問題について、世界は深刻に考えるべきだと思います。現在、国語の授業で、「砂漠に挑む」という授業をやっています。内容自体は、砂漠で植物を育てられるかというものです。しかし、僕は、砂漠化について考える心がいっぱいになります。地球が一刻も早く豊かな土地になることを願っています。

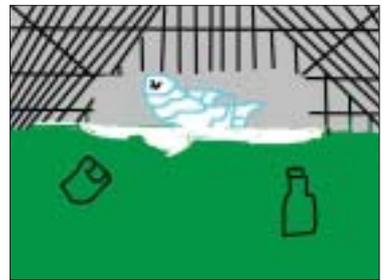
山本泰資 (静岡県・小学校6年)



### 地球の涙

今、地球は半分以上泣いています。紛争や戦争、ごみ処理もんだい、地球温暖化、森林破壊などが原因です。地球の夢は目がなくなるくらいわらうことです。そのために、私たちがしなければならぬことは何か。これからみんなで考えないと地球の涙がふえちゃいますよ。

加賀見香穂 (東京都・小学校6年)



### 泣いてた魚

この前、近くの川にコイが泳いでいました。その魚は、ずっと前、ゆったりと泳いでいました。しかし、この前ははどうでしょう。しっぽを大きく振り、急いで泳いでいます。まるで、もうこの川がきれいなのかというように急いで泳いでいます。

その魚は、今、もう一度も姿を見せてくれませんか。今はきっと、ゴミのすくない川で自由にすごしているのだと思います。そして、この川がきれいになったら帰って来てくれるのだと思います。

角田忠恕 (静岡県・小学校5年)



### 地球を救うスーパーマン

今地球が、様々な問題をかかえているのはだれでも知っていることです。ポイ捨てをしない、森を減らさない、ムダ使いをしない.....

あたりまえのことでも、実際にそのあたりまえのことをやろうとする人は、ごく一部です。生まれて育ったこの地球。楽しんだり悲しんだり、喜んだり、怒ったりした、自分をすべて見てきてくれた地球を、けがすようなことをしてよいのでしょうか。私は、そうは思いません。でもこのままでは地球をゴミ袋へ入れてしまうことになりかねません。この地球を救う方法はたった一つです。今を生きる私達ががんばるしかないのです。私には夢があります。でも、このままの地球環境では、私たちの未来が危ないのです。地球を救うスーパーマンは私達といえるでしょう。

櫻井晴奈 (静岡県・小学校6年)



### こんなことになると前に.....

もし地球の海の色が、紫色になったら...。しかし今なら間に合います。地球温暖化の問題を抱えています。だから、自然を大切にしましょう。そして、明るい未来へ向かって努力していきたいと思っています。みなさんも、協力をしてください。

関 友彦 (静岡県・小学校6年)



### 宇宙人もあこがれるきれいな地球に...

- ああ、このごろよくピンポイントな形をしたものをみかけるけど、あれってなに?
- あれはね、ペットボトルっていうもので、のみもが入っている便利な物だよ!
- それをときどき森や海でみかけるんだ。
- えっ! そうなの! じゃあ森や海でゴミを捨てている人がいるんだ。
- きっとそうだよ。人がゴミを捨てていって森や海が汚くなる。僕は地球がうらやましくてきたのに、こんなになっていったんだ。だって僕は昔のほうが好きなんだ。
- 私、やっつきついた! これからはゴミをリサイクルで減らして森や海をきれいにして、宇宙人がまたうらやましく思うような地球にするんだ!

永島綾子・添川亜紀子 (東京都・小学校6年)



Column

ほっとな出会い

MAYUZUMI MADOKA

名前だけ訊いて別れて風薫る

黛まどかさん(俳人)

◎四年前の春、黛さんは巡礼の旅に出た。きっかけは、パウロ・コリリヨ作の『星の巡礼』という一冊の本との出会い。この本でカトリック三大聖地の一つであるサンチャゴの巡礼道について知り、キリスト教徒ではなかったがどうしても歩きたいと思い旅立った。

サンチャゴ巡礼道は、夜になると道の上に天の川が広がり、別名「銀河の道」と呼ばれています。今でも年間に数名の死者が出るほどの険しい道のりでもあり、厳しい顔も持ち合わせています。北スペイン特有の焼けつくような太陽に照らされながら、48日間、900kmを歩き続けました。

歩き始めてまもなくピレネー山脈越えがあります。山歩きの経験のない私は、足の痛みや肩に食い込む荷物の重みに最初は泣きました。でも、足のマメがつぶれて歩けなくなれば、荷物を手分けして持つてくれて私に合わせてゆっくりと歩いてくれた巡礼仲間や、泊まる宿がなく途方に暮れていれば巡礼宿まで案内してくれた村の人など、たくさんの人々に助けられたおかげで歩き続けることができました。

◎巡礼宿から次の巡礼宿までを歩く毎日。歩き始めの頃は青麦だった景色も、やがてゴールが近づく頃には見事な黄金色の麦秋になっていた。そんな景色のなか、黛さんは毎日俳句を作っていた。そして巡礼は俳句に似ていると感じたという。

巡礼では「こんちは」と言ったら、すべて「ちちつなら」を言わなくちゃいけない。



1994年に『B面の夏』50句で第40回角川俳句賞奨励賞を受賞。女性だけの俳句結社『月刊ハッピーバーン』代表。

けない。巡礼者同士でもそうですし、まして村人となるとおそらく二度と会えないでしょう。だからこそ、共有できる時間を大切にして楽しく過ごしましたし、道中で再会できたときの喜びはこの上ないものでした。

俳句も同じで、道端に咲いている小さな花を詠むことは、偶然、この時代の同じ瞬間の同じ場所に立ち会ったからこそ共有できた一瞬なんです。この花はまもなく枯れてしまつけれども、十七音という器にこの花を詠むことで、永遠に命を輝かせていくことができます。そういう意味で、巡礼も俳句もその出会いはすべて一期一会と言えます。

◎約312万歩を歩いてゴールに到着したときは、感動よりもさみしさのような虚脱感のあつた複雑な気持ちに襲われた。

巡礼を終えても、自分自身の中にドラマティックな変化などは起きませんでした。

たが、約312万歩をただひたすら歩いて、その中のどんな小さな一歩も、それがなければゴールには到達できなかったとしみじみ思いました。それは人生にも言えることで、どんなにつまらない一日でも、その一日なしでは明日は来ません。ウルトラCや近道はなくて、小さな一歩がすごく大切なんだと、この巡礼から学びました。

◎今年になって黛さんは再びサンチャゴ巡礼道を訪れた。それはこの道を舞台にした映画『Within The Way Without』内なる道を求めて〜』に出演するため。監督のロレンス・ポウルディング氏は、黛さんが巡礼の際に出会った仲間だった。

この映画のテーマは、違いです。人種も言語も宗教も文化も習慣も違う人たちが、一つの道を手を貸し合いながら歩いていく姿を通して、違いとは何かを問いかけます。巡礼者は何十カ国もの国から来ていますが、私自身、巡礼道を歩いていたときに、言葉や文化の違いで乗り越えられるものなんだなあと実感しました。巡礼で出会った人たちとは、お互いの違いを尊重し合ったというか、面白がっていたね。違いを乗り越えることこそ、平和につながるんだと思います。

この映画は来年7月にスペインで公開されます。

映画『Within The Way Without』の詳しい情報は  
http://www.sevensaints.com/  
『月刊ハッピーバーン』の詳しい情報は  
http://homepage3.nifty.com/happburn/

編集部より

学校の信頼回復が社会的に注目される中で、「知っておきたい教育NOW」では、「学力調査」と「学校評価」という二つの評価に関わる話題を取り上げました。いずれも学校の教育活動の成果を測るバロメータとして、結果の公開という点に、つまり学校や子どものランク付けや序列化に関心が集まっています。これに対し、安彦・木岡両先生の論考は、調査や評価の結果をもとに、その後の指導の改善策を具体的に講じることこそが重要であると共通して指摘し、結果だけの一人歩きに警鐘を鳴らしています。

“わたしの「地球となかよし」メッセージ”大賞の小山菜月さんは、今なお続く戦禍への悲しみや怒りをぶつけるように、「分けなくていい。国なんかなくていい。ケンカしなくていい。戦争はいらない」と人類共生への願いを宣言しています。“ほっとな出会い”にご登場の黛まどかさんも、厳しいサンチャゴ巡礼道を入種も言語も違う何十カ国の人たちと互いに手を貸し合って歩き通した経験から、「違いを乗り越えることこそ平和につながる」と語っておられ、期せずして両者の主張が響き合っています。

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。